研究ノート

中津祇園会

――歴史と伝承――

金丸吉郎

(一) 闇無浜神社

吾妹子が赤裳ひづちて植えし田を　苅りて収めむ倉無浜

万葉集第九巻に載っている闇無浜を歌った歌で、柿本人磨の作と言われている。

ここ闇無浜は一名、龍王浜ともいい、古くから風光明美の地として知られ、県境山国川を隔てて西は高浜、東は同じく万葉集に詠われている名勝、間々浜に続く。

この闇無浜は、三保、高砂の松原にも譲らずと言われた名勝地で、古来より文人墨客の杖を曳く者限りなく、その景観を歌った詩歌の類も、また枚挙にいとまない程である。

後世、三浦梅園は、無暗渚春暁と題し、

渚在二中津城之東北一。有二豊日別神廟一。

所レ祭則天照大神也。予友賀子登曰。

父老相傳。神功皇后征伐之時。

龍出二神廟一而飛。今猶龍燈以二風雨之夜一。

来二懸松一。故土俗曰二龍王濱一

神昔驅龍起風雨。龍将風雨送王舟。

王舟東返龍亦蟄。龍火猶将風雨浮。

花映城樓天欲曙。月含烟樹水如秋。

東方未上扶桑日。五色雲蒸大八洲。

と龍王浜の由緒と風光を謳っている。この景勝の地に闇無浜神社が鎮座されているのである。闇無浜神社の創祀は古く、社伝では第十代崇神天皇の御代という。祭神は、豊日別大神、瀬織津姫神、海津見神、武甕槌神、経津主神、天児屋根神、別雷神であり、末社に船魂住吉社、恵比須社、稲荷社、厳島社、金刀比羅社がある。また境内には豊日別大神の垂迹されたという大石があり、「霊鳥石」といって保存されている。

爾来、朝野の尊崇厚く、天平十二（七四〇）年大宰少貳藤原広嗣謀叛の折、朝廷は佐伯常人、阿部虫麿を征討将軍として西下させ、神主重松富麿に朝敵退散の祈願を祈らしめたところ、神威の現われにより、賊兵を平らげることが出来たという。朝廷はこのことを喜び、甲冑弓箭を奉納し、大神の霊験を大いに表奏し、富麿に六位を賜ったという。

又、宝亀二（七七一）年には疫病鎮滅の祈願をなさしめ、延暦九（七九〇）年には、この地方に相次いで天変地異の災禍あるをもって、祈祷せしめたという。この年領民は災害のため困窮甚だしく、祭典を止めようとしたところ、領主は倉庫を開けて物資を出し、領民のために祭典を賑わしく行なわせたということである。

天慶四（九四六）年、藤原純友の乱に当り、朝廷は小野好古を征西将軍としてこれを討たしめ、好古は重松宮司に、純友降

伏の祈祷をせしめて純友を降したという。

尚又、弘安四（一二八一）年、蒙古襲来に際し、朝廷は豊前国国司、宇都宮頼房に院宣を賜り、大神に敵国降伏を祈らしめたという。この時、神主大和守義繁は、神輿三殿を奉じ澳に行幸ありて、降伏祈願を行ない、七日七夜祈祷を続け、丁度満願の夜となりたるところ、龍燈蔭無松より燃えいで、海上に輝き渡り、西天に飛べるが大風俄に起り、賊船悉く覆滅したりと、伝えられている。

蔭無松はこの時既に、数百年を経た大樹であったが、蔭をつくらなかったという、尊い神木であった。然しこの龍燈により枯死してしまい、其の後補植したが、又度々の落雷により枯死したという。

こうした数々の神威に喜ばれた朝廷は、宇都宮頼房に勅諚を賜り、弘安五（一二八二）年本社、末社共に修理をせしめ、同六年三月三日遷宮式を行ない、これと共に流鏑馬を執行、以後神幸祭の例としたのである。

又同年六月十五日には、氏子に命じ傘鉾、屋台等の配列をなさしめ、神幸祭の余興とし、祭典を一層盛大に、又賑やかにしたという。この流鏑馬は藩制時代ずっと続けられていたのであるが、明治になってから廃止された。

闇無浜神社は、以前は「豊日別宮」といい、丸山の城中に鎮座していたのであるが、参詣するに不便であったため、宮地をトして祇園社の鎮座する闇無浜に遷宮したという。

第九十九代、後醍醐天皇の御代、建武元（一三三四）年のことと伝えられている。この由緒ある闇無浜神社の摂社として、わが中津祇園、八坂神社があるのである。

(二) 中津祇園の創祀

祇園の総本社である京都祇園も、その創祀については、いろいろの説があり、確定的なものは不明であるが、中津祇園も京都から勧請されたという事は分っているが、それが何年何月であるかという事はわからない。

闇無浜神社は先に述べた様に古社であるが、これについても度々の戦禍により、古文書は散逸し、或いは盗賊が神庫を破って宝物を盗み出したりして、古文書類は殆んどなくなって終ったが、わずかに免がれた古文書を、時の宮司、重松刑部少輔義房がまとめ、或いは諸家を尋ね歩いて一巻にまとめたという。

それらの文書によると、建武元（一三三四）年の時、既に祇園社は竜王浜に鎮座していたという。今より六百四十六年も前に当る。

ご祭神は京都八坂神社と同じく、須佐之男命、櫛稲田姫命、八王子命と申す、五柱の男神と三柱の女神である。一説には、行基が来宮し薬師如来像を刻し、奉納したという伝承もあり、また薬師如来は日本へ渡って来てから、須佐之男命として垂迹したという故事もあり、祇園神と薬師如来が密接なる関係にあることを考え合すれば、或いは更に古いことかも知れない。

京都祇園社も神仏混合時代には、薬師如来を本尊として祀ってあったのであるが、明治初年の神仏分離令により、薬師如来は近くの大蓮寺という寺に移したという。

ところで中津市鷹匠町にある、東林寺という寺は、中津で一番古いお寺である。開基は聖一国師で、開山の年は仁治二年といい、その昔、七堂伽藍を擁した大寺院であった。幾度も戦火に遇い、大伽藍は焼失して終ったが、その戦火の中を守りつづけられて、ここに尊い薬師如来像が、一体安置されている。

現住職の瀬川昌邦和尚は「その昔、竜王宮とは縁故浅からぬものがあったと聞いている」と申されているが、竜王の祇園社に、この薬師像があったものか、どうかは分らない。この薬師像が盗賊の手によって、廻り廻って東林寺に落ちついたという事を考える事は、強ち不合理なことではないと推理されるのである。

何れにしても、薬師如来と祇園神、そして中津祇園と東林寺との間には、目に見えない糸のつながりがあるように、思われてならない。

中津祇園社の鎮座する所を、古来下正路浦といった。神社のすぐ下は海であり、汚れを知らない海水は、美しい砂浜に漣を作

って遊び、近くには企救の山々が、遠くには四国の連山が水平線上に望見出来て、正に一幅の絵画を思わせる風景であった。

この下正路浦の漁民が船で祇園社を勧請して、帰って来たのである。それ故に、下正路浦を「次官」といい、祇園祭の時、又秋祭の時には特に「次官祭」を行なうのである。この「次官祭」は現在まで、ずっと続けられている由緒ある祭りである。本稿で考えようとしている祇園祭は、ずっと下正路浦の村祭として、ささやかに祭られて来たものである。

その当時の祭りの状態としては、御神輿一殿で、先頭に御幣を立て、道神楽を奏じつつ、境内の闇無浜を東から西へ、西から東へと往きつ、戻りつする程度であった。

(三) 中津祇園の戦禍

鎌倉時代から室町時代にかけて、ここ中津地方に於ても、幾多の戦いが行われ、激戦の坩堝となった。その戦争の犠牲となって、恐らく祇園社も焼失して終ったのであろう。長い間の空白があった。

下正路浦金丸家に伝っている古文書を繙いて見ると、永享二（一四三〇）年丸尾何某、霊夢によって長岡忠興公勧請再建とある。

ところが其の後、永禄四（一五一六）年大友宗麟と大内義長の戦いにより、闇無浜神社共々灰燼に帰して終ったのである。その時、須佐之男命と櫛稲田姫命の二神は辛うじて持出すことが出来たが、三座の内子供の八王子神をついに紛失して終ったということである。

熾烈を極めた、大友、大内の戦火も漸くおさまり、祇園社も再建されたので、紛失した八王子神を方々探し求めたが遂に発見することが出来なかった。

金丸家古文書に、これについての伝承が記載されているのでご紹介しよう。

漸く平和をとり戻したある日のこと。直江村（福岡県吉富町字直江）の亦左衛門という漁師の枕元に神霊が現われ、同村の

沖、「鉾の洲」という所に、八王子神がお迎えを待っているから、早速迎えにゆき祭祀せよ」というお告げがあった。

直江村は山国川一つへだてた、中津市の西側に当る所であるが、亦左衛門は夢うつつにそれを聞き、ふと目覚めたのである。正しくご神託に外ならぬと気がつくと、はね起きて、まだ明けやらぬ直江の浜から舟を出して、暗闇の海を沖へ沖へと漕いで行ったのである。

ご神霊の申された「鉾の洲」という所であろうか、丁度そこまで来た時、海中に異様に光り輝くものを見つけたのである。亦左衛門は、その光り輝く所へ舟を近づけてゆくと、体中がじいんと引き締る心地がして、神厳の気に包まれたのである。これこそ、ご神託の祇園の神に外ならぬと、亦左衛門は海中に飛び込み、その光り輝くご神体を舟に上げ、直江の浜まで戻り、浜の近くにある池の水で、そのご神体をよく洗い浄め、直江に祀ったのである。

これが現在、直江の氏神として祀られている祇園神である。

ご神体を浄めた池は、その後「御祓池（みそぎいけ）」と呼ばれ、今もなお直江の海岸に残され、祭礼の際はその池まで神輿をかついで行くという。

竜王祇園社で紛失した八王子神であるが、その事により中津祇園社の方では、以後毎年六月の中津祇園の際には、直江にその祇園神をお迎えにゆき、八王子神を迎えてご三座として祇園祭を行なったのである。

このことは「宮柱亦左衛門次官神送りの神事」として、古式に則とった神事が行なわれていたのであるが、この神事も明治まで続き、現在は行なわれていない。この事は「祇園大帳」に記述されているので、私はこのことを確認したいと思い、ある日直江にゆき、方々を探し歩いた揚句、「是石三二」という人に会う事が出来た。是石三二氏は亦左衛門の子孫であるということを知り、私が前述の伝承を話すと、是石氏もそのことは先祖代々、伝承としてうけついでいるということであった。

㈣　中津祇園祭の起り

その昔、一寒村であった下正路浦に、細々と続けられていた村祭、祇園祭が、今や豊前三大祇園といわれ、九州三大祇園祭と言われるようになったのは、黒田孝高入城以来、各藩主の援助の賜である。

黒田、細川、小笠原、奥平各歴代藩主は、闇無浜神社豊日別宮と共に、この祇園社を祈願所として、格別の庇護のもとに祭礼を執り行なって来たためである。

特に中津祇園祭は、小笠原時代に形も整い盛大に行なわれる様になったので、小笠原時代の歴史を少し加えつつ筆を進めてみることにする。

寛永九（一六三二）年十二月に、小笠原長次は播州龍野六万石から、二万石の加増をうけて中津城主として入城した。

小笠原氏は、鎌倉時代から守護を勤めた名門であり、小笠原弓馬の秘訣礼式の主流でもある名家である。

徳川幕府は小笠原氏の勲功にも報い、且つ中国、九州の探題的役目も持たして、中津と小倉及びその周辺に一族を配したのである。

中津藩初代長次公は、稀に見る名君であった。賢臣にも恵まれ、善政をしき、神社仏閣等を保護し、又市内相原から城下まで石の樋で水道を引き、美しい水を領民に提供する等数々の善政をしいたので、上下四民は安んじて国政に勉め、斉しく尊敬した。

城下十四町の町割もこの長次が完成させたのである。

長次は寛文六（一六六六）年五月病没したが領民はその死を大変悲しんだという。

その死の際に老臣を集め、われ死したる後は家督は長子長知にせず、次子長勝にすること、又われを葬むる時は甲冑を着用し、大小刀を帯び、手に払子を持たせよ、と遺言して静かに死についたという。老臣達は遺言通り甲冑を着用させ、広津山

（吉富町天沖寺山）に葬った。

長次の死後、藩主擁立について、重臣達の間に争いが起り、内紛がおこったが、結局長次の遺言に従い、次男である長勝が家督を継ぐことになったのである。

寛文六（一六六六）年藩主になった長勝は、その当座は非常な意気込みをもって、藩政を行なった。

寛文八（一六六八）年二月、肥前国島原の領主、高力左近大夫隆長が封を除かるるに当り、幕府は長勝にその城の受取りを命じた。高力の家臣は死を決して、籠城の備えをしたというが、長勝は四千四百余人を引きつれて中津を発し、戦争を起すことなく、無事に城の受取りを行ったのである。幕府は長勝にその功を賞して、高田領二万八千石を領地として渡したという。

然し、元来病弱であった長勝は、延宝元（一六七三）年頃から欝病にかかり、塞ぎ込んでしまう日が多くなった。

重臣達は心配して、いろいろと思案したが、気晴らしのためにと、山国川畔に離亭を作って、そこで静養するようにとすすめた。

ところが長勝は、重臣達の思いやりとは裏腹に、遊びの味を覚え、欝病からの躁の状態に一変し、豪遊をし始めたのである。代は徳川第四代将軍、家綱の時代であり、この頃になると戦乱も漸くおさまり、安定した世代となっていた。

奇しくもこの延宝元年は、わが中津祇園が形を整えた祇園祭として、始めて行なわれた年でもある。

この年の祇園祭は六月十四日、十五日の二日間であった。

この年、角木町次官より獅子造って出し、豊後町からは山車に御幣を立てて出し、下正路次官からは、船に御幣を立てて出したという。

豊後町の山車と言っても、大八車の四方に笹を立て、メ縄を張り中央に御幣を立てて出した位で、下正路次官も船にグルをつけて、御幣を立てて引張った程度で、現在の祇園車からは、およそ想像もつかないお粗末なものであったのである。

御神輿は壱殿で、当時は一番橋から下の方だけの行幸であった。

先づ初日の十四日に神社を出た行列は、境内の西之浜（下正路）まで行き、そこを御旅所とし　翌十五日に、御旅所を出て一番橋まで行き、折返し神社まで戻って来たということである。

至極簡単な祇園祭であるが、これが各町が寄り合って行なわれた、最初の祇園祭であり、意義ある祇園祭であった。

小笠原長勝と中津祇園祭は、このように特に因縁あるものであるが、長勝時代の中津祇園祭は、まだ草創時代であり、簡素な祇園祭が暫らく続いたのである。中津祇園祭発生と、時代を同じくした長勝は天和二（一六八二）年三十七才で没した。

㈤　中津祇園の発展

天和三（一六八三）年になると、徳川幕府も五代将軍綱吉の治政となっており、世は正に華やかな、元禄時代に入っていた。綱吉は武家への厳しい、諸法度を緩和する一方、文化の向上に力を注いだ、いわゆる、世に元禄文化と言われている。

この時代、中津祇園も一大発展をしていくのである。

この年、豊後町有志が相計って、この中津祇園は、京都祇園社から勧請された、由緒ある祇園社である。だから京都祇園に倣って美しい山車にしてはどうか、という事を発案したのである。衆議は忽ち一決し、このことを早速藩主に願い出ることになった。

当時の中津藩主は、小笠原三代長胤で、まだ十六才、漸くこの正月に藩主を嗣いだばかりであった。

時代もそうであったが、華美を好む長胤は早速この事を許し、美しい山車をわざわざ京都から取り寄せて、これを豊後町に与えた。これが豊後町の、御神殿山車である。

この時、下正路には「天鳥丸」という御座船が下賜されたのである。爾来下正路町は、この船を山車に乗せ、その上に御神輿を積んで巡行しているのである。

これが由緒ある。下正路船山車の初めである。

長胤も藩主になった当初は、積極的に大規模な土木工事を起した。すなわち貞享三（一六八三）年には荒瀬井堰の工事にかかったのである。

これは二十八ケ村、千余町歩の田圃に灌漑用水を供給しよう、という大工事で、その当時の中津藩では、一寸無謀とも思われる大工事であった。

その莫大な費用のために、藩財政は逼迫してしまった。窮余のあまり、財政の立直しとして、藩札を乱発したため、物価は上昇し、商品には苛税を課したため、商人も農民も非常な苦しみで、毎日数百人の餓死者が続出したという。

それに加えて、長胤もまた遊蕩に耽り出した。藩財政の逼迫を尻目に、京大坂から遊女を寄せ集め、昼夜を分たず歌舞宴遊に耽ったという。

この状況を知った幕府は、元禄十一（一六九八）年七月、遂に長胤から領地を没収し、その身柄は小倉藩に預けられることになった。藩財政の逼迫も遊蕩も、長胤の失政ではあったが、世は太平の元禄時代であった事も、長胤を遊蕩に走らせた原因の一つにあげられよう。

然し、領民のために大工事の荒瀬井堰を作った事は、長胤の功績少なからざるものがあり、現在その恩恵を蒙っていることを考え合すれば、やはり長胤は凡君ではなかったのである。

そして中津祇園にとっても、長胤は忘れることの出来ない、恩顧ある藩主であったのである。

㈥ 祇園祭の隆盛

元禄十一（一六九八）年七月、長胤が封を奪われた翌日、幕府は特旨をもって下毛、宇佐二郡の内、四万石の地を長胤の弟、長円に与えた。この時長円は二十三才。代々の忠臣、小笠原氏を幕府はやはり見放してしまわなかったのである。

長円は藩政立直しに、非常に努力をしたのであるが、八万石から一挙に半分の四万石になったので、藩政の立直しも大変な

事であった。長円は諫言によって、長胤に逐われた旧臣、小笠原彦七、島立内蔵介、原安太夫、飛田勘兵衛、竹内求女らを召し返して、元の地位につけ、奸臣らを追放した。また多くの家臣を陶汰し、その数、千人にも及んだという。そして藩財政の立直しに懸命の努力をしたのである。

幕府も漸く長円の努力を認め、同十四（一七〇一）年四月、大猷院家光の五十年忌法要が、日光廟で執り行なわれるに当り、選ばれて勅使御馳走役を仰せつけた。

ところで、祇園祭に関してはこの年から龍王浜では、芝居小屋がかかるようになった。

当時芝居座は、北原組、池永組というのが大きな芝居座で、祇園祭に際してはこの二座が、一年交替で小屋掛けを行なうことになっていた。

元禄十五（一七〇二）年といえば、赤穂浪士が吉良義央を討った、有名な「義士討入り」の年であるが、この年の六月の祇園祭には、惣町より鉾壱本宛を出している。

これまではまだ豊後町の御神殿山車と下正路の神輿船山車と角木町の舁ぐ御神輿を中心とした、簡素な祇園祭であったが、この年には、一町内から一本宛の鉾を出すようにと、厳しい申付けがあって、相当賑やかな祇園祭が催された。

翌十六（一七〇三）年未六月には、角木町次官は、子供を山伏に仕立て「六人峯入」と名附け、御神幸の真先に出した。

そして、この年に桜町が初めて山車を出したのである。天和三年に豊後町が山車を出して、実に二十一年目の事であった。桜町が祇園山車を出してから、下八町は急速に山車の気運が盛り上っていった。

調子ずいた祇園祭は年々賑やかになっていった。桜町に遅るることわずか三年、宝永三（一七〇六）年に、塩町、姫路町、堀川町の三町内が山車を出し、翌宝永四（一七〇七）年には船町、米町がこれに続いた。かくして下八町の祇園山車が揃ったわけである。

藩主の援助もあって、各町内は競うて山車を飾り、竜王浜では賑やかに芝居が行なわれ、城下市中は祇園祭の大売出しで、

人々は町中にあふるる大賑いとなった。

こうして中津祇園は確実に基礎づけられたのであり。これをもって、中津祇園第一期の隆盛期とも言うべきであろう。

(七) 祇園車城内通行の始り

呼び戻した賢臣達と共に努力したため長円は、除々に藩の財政を立て直していった。

宝永五（一七〇八）年には幕命を以て駿府に赴き、その城番となった。その後同年九月江戸に還り、多年の努力も漸く認められて、実を結びつつあった。そして宝永七（一七一〇）年長円は中津城に帰った。

然し、名門小笠原氏には、先祖から、鬱病の体質があった。長円も元禄の終り頃から、少しその気配が見え始めていたが、国元へ帰ることが出来たので、これで充分養生させてあげることが出来ると、重臣達は喜んだ。

そして早速、鬱病を晴らすために、東浜村と新田村との間にある松原に、別亭を建てて養生させることにした。立派な庭園を造り、蛎瀬、大塚の浜を堀って川を作り、舟を浮かべて城内から往き来出来るようにした。また室内には豪華な装飾を施し善美をつくしたという。

ところが、この老臣達の善意を裏切って、長円はしだいに長勝、長胤の二の舞を踏み始め、昼夜を分たず歌舞宴遊に耽り出した。老臣達は心配して、いろいろと諫言したが、全く言うことを聞かず長円の遊蕩は、ますますひどくなるばかりであった。

また正徳二（一七一二）年の春には、長円は桧原山で大規模な狩りをした。勢子として狩り出した農民は、八千人にものぼったという。

五日間にわたって、数千の鳥獣を獲て帰城したが、この時の疲れが出て長円は発熱し、うわごとを言うようになった。怯え切った形相で、刑死者のこと、餓死者のことなどを言うので、皆驚いたり、恐れをなしこれは刑死者や餓死者の怨霊のたたりだと考えた。そのため老臣達は相計って、法性寺や開善寺で刑死者や餓死者の供養をしたり、羅漢寺に銀五十枚を奉納して怨

霊の供養をした。

然し病は長びき、なかなか治らなかった。かくして老臣達は神仏に祈るとともに、藩主の病気を治したい一心で、怨霊の鎮魂と縁の深い祇園祭の盛行をはかったのであった。

金丸家に保存されている。「祇園大帳」には、

「正徳二年辰二月、町中に御沙汰有之、当年より祇園祭礼に、惣町より車差出し可申旨被仰渡、並に神輿共々北門より御本丸通行、椎木御門前にて御祈祷相勤可申由、被仰渡候、上六町は車差出し候儀難渋申候処、六町にて車貳ツ差出可申段被仰付候、当年より初めて御城内通行、中ノ町、新博多町、米町を下り也」

と記されている。

この時には下の方は、既に八台の祇園車が揃っていた。上の方も六町内全部祇園車を出す様にと申し付けたのである。そして北門から入って樫木門を通り、椎木門の前で藩主の病気平癒を祈願せよという事である。

誠に勝手な言い分ではあるが、町民にとっては当時としては光栄この上もない事であった。

然し時は既に二月、六月の祭礼までに上六町が全部出すことは、倒底難かしいことである。上六町の世話方は揃って、この旨を申出たところ、それでは六町で祇園車二台を出せと申付けたのである。

どうにか上六町も二台の祇園車を調達し、下八台と神輿共々城内に入り、椎木門前で祈祷の上、西門から出て中ノ町、新博多町、米町を下って、市場の御旅所へ行ったという。

当時庶民の祭である祇園車が、城内に入るという事は、全く画期的な事であったが、老臣達の忠心と苦慮のほどが窺える。なおこの「中ノ町」というのは、現在の殿町のことである。

こうして祇園車が城内に入ることが、例となったのであるが、翌年は京町を通って姫路町を下ることにし、さらには古魚町を通って、船町を下ることとして、これを三年交替で繰り返すことにきめられた。

然しこの取決めは、正徳三年と翌四年に実行されただけである。なぜならば正徳五年になると、「本年の祇園祭には城内に入るに及ばず」との仰せつけが出たためである。勝手な仰せつけであるが、実は正徳三年の祇園祭の時は、長円重病中であり、正徳四年は既に長円死亡し、幼い藩主長邑の時であった。しかしこの長邑が、翌年二月、江戸詰となったため正徳五年の祇園祭は、藩主不在の中で行なわれるのであるから、「城内に入るに及ばず」となったのである。

そのため巡幸は以前に戻り、竜王から下正路、出町、角木町、角木新町、北堀川を通って市場の御旅所に入り、翌日御旅所から直接竜王へ帰ることになったのである。

(六) 小笠原氏の終末

神仏の祈祷も、名医の手厚い看病もあまり効果もないまま、時は正徳三年になった。

四月になってから長円は、祇園祭について特に厳重な申渡しをしている。祇園大帳を見ると、

「町奉行永山武左衛門殿をもって、祇園祭礼の儀は城下市中七日の間執行の趣を、大公義へ御被露御届ケ遊され候間、惣町中より車等厳重急度(きっと)差出し可申旨、被仰渡、市中御堅めとして、此節より芝居御桟敷に、町御奉行大目付衆、大火之廻り、小火の廻り其外諸役人中御出役、被仰付御道具類、鉾借諸事厳重にて、市七日、六月十日より同十七日迄、十四日、十五日を神幸還幸也、御奉行大目附衆は利生院休足所、其の後右利生院破損に付、安全寺を休足所と相成候也」

とある。

このときすでに長円は自分の病気は、もう回復出来ないと感じていたのかも知れない。事実この年の祇園祭が、長円にとっては最後の祇園祭であった。

この年の祇園祭は、例年通り御神幸は六月十四日、十五日の二日間行なうこと、然し市中の大売出しとか、芝居等は十日から始め、祇園車を持っている町内は必ず出して、大いに賑やかにやること、祇園祭を賑やかに行なうためには町に火災等起さ

ぬ様、諸役人が出て、厳重に火の取り締りをすること、それから御奉行、大目付衆の休足所は、最近利生院が破損しているので、安全寺で休足することなど、細やかに注意をして、祇園祭を盛大にする様に申し渡している。

長円の心中を思うと哀れさを覚ゆるが、それだけにこの年の祇園祭は盛大に行なわれた。

祇園祭をこよなく愛した長円は祭りもすみ市中の賑いも静かになって空しい日々を送っていたが、遂に十月息を引きとった。死の直前、寿命を覚った長円は老臣達を枕元に集め、自分の行なって来た悪政を反省し、長男長邕に家督をつがせ、善政をしくように遺言して、三十八才の生涯を閉じたのである。遺体は広津山（福岡県吉富町天沖寺）で火葬され、現在初代藩主長次の隣に墓が建てられている。

然しこの時、長男長邕は年令わずかに四才。四才の子供では、善政もなにも分るはずがない。老臣の間に藩主の擁立でいろいろ意見が異り、騒動が起ったりしたが、結局長邕が藩主となった。

ところが、藩主になってわずか三年、生来体の弱かった長邕は、遂に享保元（一七一六）年九月に病没してしまった。時に長邕七才。後嗣なきため領地は没収され、ここに八十四年間の小笠原の中津統治は終りを告げた。

(九) 奥平藩制時代の中津祇園

小笠原の後をうけて、丹後宮津から十万石の領主となって転封してきた奥平昌成は、享保二（一七一七）年十月十六日に、始めて中津城に入城した。

小笠原氏時代の不始末により、城下領民の心は乱れていた。名君の誉れ高い昌成は、入国する前に領内の事情をつぶさに調べる事にして、四月には吟味役や、代官等をあらかじめ派遣して調査させ、神社、仏閣、祭礼等についても報告させた。

その時祇園祭礼について、重松宮司は次の様に報告している。

一、御尋について社司より書上候

覚

祇園祭礼神幸之道筋は、先年より竜王浜を御出、下小路出町御通、角木町、船手新町より北堀川え御出、大橋本御旅所え御入成され候、然れ共、正徳三巳年仰付けられ候は、御城内、町内御祈祷のため御城内より町内え神幸仕るべき様、初めて仰せつけられ候。

之に依り北御門え御入りなされ、黒御門通り、西御門御出、八幡義氏宮の前御通り、中ノ町え御入り、新博多町、古博多町、米町、堀川町之船場え御出、橋本の御旅所え御入成され候。

十五日還御之節は橋本より直ちに御宮に御入り成され候、

右車に芸御座候年より、御城内を始め、中ノ町の外御通り筋に御座候

上々様御家老中役人中に於ける、御屋敷の前に車を留め芸御座候、

一、正徳四午年も前年の通り御城内御通成され候、町内は中ノ町より御出、京町、姫路町御通り、堀川之船場より橋本御旅所え御入成され候、

右之通り町内御通り筋年毎に相替り候は、町内御祈祷として正徳三巳年より仰せつけられ候に付、新博多町通り、古魚町通り、京町通り、三通り三年に壱度宛御通り成され候義に御座候、

正徳五未年仰せ付けられ候は、今年祇園御通筋は御城内より町内に御入なされ候に及ばず、先年の通りに仕るべき旨仰せ付けられ候。

之により先年の御通筋、下小路より出町、角木町、船手新町より北堀川御通り御旅所御入成され候。　以上

七月二十二日

重松源内

悴富之進

山本佐右衛門様

（朱筆）

右は亨保二酉七月廿四日出す

本文の内容は先に書いた小笠原長円が、病気のため城内へ祇園車を引き入れ、病気全快の祈祷をさせた事であり、正徳五年については長円の死亡により、祈願の必要もなくなったための、城内通行の停止をいみしていたが、重松宮司は大変頭のよい人で、そんな事にはふれずに、ただ道筋だけを書き上げて、前藩主が非常に祇園祭を奨励し、保護していた事を強調しているのである。

ここに書いてある中ノ町というのは、現在の殿町で、船手新町というのは、現在の角木新町のことである。

そこで右口上書に対し、次のような返事が来ている。

亨保二酉八月十六日

一、龍王祇園車の儀、惣町より右之者車出候処、上六町之儀は五三年前に可向止め申候、下八町之儀は五三年順番にて、一年に車三四挺程づつ出し申由御聞届に付、仰出され候は、宮津にては芝居等御法度に候え供、ここもとにては左様に致し来り候故、神事は所々賑に候間、随分賑に仕候様、先格之通り上六町も車出し申すべく仰せつけられ候所、当年は車出来合申さず段申上候処、当年は其のまま、弥明年より車残らず出し候様仰せつけられ候、

当年車出し申さず町は古来の通り、鉾出し申すべく候、下八町の儀は申すに及ばず差出候様仰せつけられ候、

即ち、自分が今まで居た宮津では、祇園祭に芝居等行なうという事は固く禁止されていたが、この地中津ではそんなに賑わしくしているのなら随分賑やかにやるがよい。

ここ数年上の方は車を出していない様であるが、上六町も出す様に、と仰せつけたところ、本年は一寸出来かねるとのことであるから当年はそのままとし、明年からは残らず出す様にし、下八町は勿論、上六町でも当年車を出さなかった町内は、鉾

を出す様に申し付けたのである。

重松宮司の思惑はまんまと当り、宮司の心中はさぞ満足であったろうと思われる。こうして祭典も年々盛大になって行ったのである。

享保二年の祇園祭の時には、昌成はまだ入城していなかったが、下正路の船車を始め、豊後町（影向楽）、桜町、塩町、姫路町、堀川町が山車を出し、踊りや歌舞伎を上演し、船町（大福帖）、米町（笠さぎ）、新博多町（飾り山）、新魚町（大笠）、諸町（たち花）、京町（歌かるた）、古魚町（三笠山）、古博多町（生木月）が、見立飾り山車を出し、角木町は山伏峯入の行事を出した。

享保四（一七一九）年には山車が九台出て、各町夫々趣向をこらした、飾り山車や子供歌舞伎、人形歌舞伎を上演し、龍王浜では賑やかに芝居が行なわれた。

当時一般生活には倹約令を出して、絹物の着用などは禁止していたが、車踊りの衣裳には特別に絹物を許した程であった。町々には棧敷をしき、毎年昌成自身車踊りを見に行った。そして踊り子や山車の曳き手に菓子や酒肴を与えたという。

ところで昌成は延享三（一七四六）年江戸で没し、昌成の二男昌敦が封を継いだ。延享四（一七四七）年、昌成二十三才であった。この昌敦も父の施政を踏襲して、治世に専念し、又祇園祭にも力を注いだ。

宝暦三（一七五三）年の祇園祭には、上の方六町組は、今迄の作り物をやめて、操り人形踊りにしたいと申出で、これを許されている。

その当時の祭礼状況を見ると、先づ先頭に

△、頼光峯入り　角木町

△、作り物、鞍馬天狗、江戸漫才　上六町組

△、揃い踊り　米町

△、相生花笠踊り　舟　町
△、大織冠踊り　堀川町
△、神おろし踊り　姫路町
△、山路草刈踊り　塩　町
△、風流ふり物六法　桜　町
△、影向楽　豊後町
△、船車　下正路町
△、御神輿　三　殿

となっている。

二代藩主昌敦も、祇園祭を保護したが、三代藩主昌鹿もまた、父の後をついで、祇園祭を保護した。昌鹿は九才で藩主となり、在職期間はわずか二十三年、安永九（一七八〇）年七月病没したが、非常に聡明で、領民に対しては愛情ある施政をして来たので、領民は斉しく藩主を敬慕した。

彼はその頃の全国諸藩の藩主の中でも、備前の池田治政、薩摩の島津重豪と並んで名君と言われ、幕府の重臣達も一目置く程の人物であった。

宝暦年間は中津に限らず、飢饉が全国を襲った。中津藩も厳しい倹約令を発し、政情の安定を計った。しかしこのような中でも祇園祭に際しては、絹物の使用を許可し、車付の者に酒肴を与えてねぎらい、子供達に菓子や赤飯を振舞ったということから、如何に藩主が中津祇園を保護して来たかがうかがえる。

中津藩の市令録には、奥平藩時代の祇園祭典の模様が詳細に書きとめられているが、安政二（一八五五）年項には、「祇園会車踊町々より、人形に致し度段願出候所、御先代よりの御祭礼に付き願通に仰せつけられず候。」とある。

踊り子には経費が高くかかるので、飾り人形にしたいと申し出たが、御先代からの祭りであるから、それはいけない、今迄通りにせよと言われたのである。ここにも藩主の保護の強さをうかがえるのである。

ところでこの当時の行列の順序は次のとうりである。

先　頭、　高幣
二番目、　角木次官山伏ほら貝
三番目、　峰面王
四番目、　獅子一対
五番目、　上六町の山車
　　下八町の山車
六番目、　はやし太鼓
七番目、　御神輿
八番目、　神官、氏子の稚児
九番目、　町同心十人
　　町年寄八人
　　各町組頭、当番
十番目、　警固の足軽六人
十一番目、　神馬三頭

警固の同心や足軽は、物々しい火事場衣裳をつけて供奉したのである。

こうして中津祇園は、奥平治世百五十余年の間、天災や其の他の理由で或いは盛衰はあったものの、盛々しく盛大に行なわ

れて来たのである。

(十) 明治時代の中津祇園

慶応三（一八六七）年、王政復古なり、大政は奉還される。翌、明治元（一八六八）年、江戸は東京となり新しい文化が起って来るが、この年福沢諭吉は慶応義塾を創立している。

中津でも御祝儀御前芝居が催され、大変な人気をよび、上方大相撲が来たりして、新しい夜明けを告げるかのように、人心を鼓舞した。

明治二（一八六九）年には、中津藩九代藩主昌邁が、中津藩知事になる。

明治三（一八七〇）年には、下正路浦に銀杏町という花街が公許される。当時、下正路浦は海上の基地として、帆船の往来が夥しく、中国地方や阪神との商業が盛んであった。旅籠兼料亭として、大勝、高庄、玉屋、玉塚等が軒をつらね、昼夜を分たず弦歌が流れていた。

〝往こか銀杏町戻ろか船場、
ここが思案の一の橋〟

こんな俚謡が歌われ、船場町と共に中津を代表する紅燈華やかな町であった。

明治四（一八七一）年一月には、中津城は全国に先駆けて、廃城届を新政府に出した。これは先覚者、福沢諭吉のすすめによるものという。ついで七月には廃藩置県が行なわれる。十一月には中津県は小倉県に編入される。

明治十（一八七七）年には壮士増田宋太郎は、中津隊を組織して、西郷隆盛に呼応する。

このように世情はめまぐるしく変って行く中でも、中津祇園は一層盛大に、賑やかになって行った。明治十四年の祇園祭には、今までなかった船場町が、新らしく祇園車を出した。

船場町は先に述べた銀杏町と共に、花街であった関係上、人形浄瑠璃の上演が多く、街の特長を生かし、粋客の人気を博していたのであるが、戦前山車を田川市に売ってしまった事は淋しい事である。

また明治十六（一八八三）年には、中津城下段々松の御殿跡に中津神社が創祀された。そのため、従来の上六町は中津神社の関係となって、山車はそのまま中津神社夏季大祭として引継がれてゆく。通称これを上祇園といい、闇無浜に祭祀されている、八坂神社の大祭を下祇園と称するようになったのである。

下祇園の方では、明治四十二年に竜王町が今まで一緒に曳いていた下正路浦から別れて、新しい山車を購入して参加することになった。

その結果下祇園の方は総計十台の山車、上祇園の方は総計八台の山車が揃い、競争意識も手伝って、いよいよ盛会を極めて行った。

その当時は豊前に於ては、中津が中心地であったので、祇園祭の時の市中は大変な賑いであった。西は宇島、行橋、田川、小倉方面から、東は宇佐、豊後高田、日出、別府方面から、また、耶馬渓、玖珠、日田方面からも買物に来ていたのである。

市中の商店も大きな老舗が軒を連ね、祇園詣り旁々買物をして帰るので、新博多町、京町、魚ノ辻、八百屋ノ辻は身動きもならぬ程の人出であった。

[redacted]